

トップ対談 44

組合員・地域とともに


日本一のみょうが産地は こうして生まれた（上）

ゲスト／高橋 一吉（高知県JA土佐くろしお 代表理事組合長）

第43回ゲスト

高知県JA土佐くろしお 代表理事組合長
高橋一吉



たかはし・かずよし

1961年高知県生まれ。79年旧須崎市農協に入組。営農部販売課、金融部信用課課長補佐、吾桑支所長、金融部信用課課長を経て、2019年代表理事常務、22年代表理事筆頭常務、25年代表理事組合長に就任。水稻、みょうが、ブンタンを育て、出荷している。



● インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)

J A 土佐くろしお(土佐くろしお農業協同組合)

平成9年4月にJA須崎市(須崎市)、JA葉山(旧葉山村、現津野町葉山地区)、JA土佐久礼(中土佐町久礼地区)、JA上ノ加江(中土佐町上ノ加江地区)の1市1町1村の4JAが合併し、土佐くろしお農業協同組合が誕生。施設園芸や果樹、米など多彩な農業が営まれている。須崎市を中心に古くからきゅうり栽培が盛んであったが、近年はみょうが栽培が主力となっており、全国一の販売額を誇る。



●組織の概況

組合員数：5,559(正組合員：2,880、准組合員：2,679)

役員数：24(常勤・非常勤含む)

職員数：159人(臨時職員含む)

設立：1997年4月

貸出金：52億4,300万円

本店所在地：高知県須崎市多ノ郷
甲3751-11

長期共済保有高：1,730億7,900万円

出資金：12億6,300万円

購買品供給・取扱高：30億400万円

貯金：926億8,300万円

受託販売品・取扱高：108億5,900万円

令和6(2024)年度実績

●地域と農業の概況

高知県の中西部、須崎市・中土佐町は土佐湾に面し、津野町葉山地区は須崎湾に流入する新莊川の上流の中山間地に位置する。

黒潮が流れる太平洋に面しているため、非常に温暖で四季の調和がよく保たれている。冬期は北西の季節風が強いが、降雪は少ない。雨量はきわめて多く、高温多湿で作物の育成に好適。

管内はハウス栽培によるみょうが、きゅうり、ししとう、花卉などが主要作物で、特にみょうが栽培は、全国一の販売額75億円を誇る。

日本一のみょうが産地はこうして生まれた（上）

J A 土佐くろしおの1戸あたり耕作面積は50アール程度と小さい。この土地の狭あい性と冬季の温暖な気候が高密度の施設園芸産地を生み出した大きな理由である。特にみょうがは日本一の産地として知られる。今回は、その産地形成の過程をご自身もみょうが生産者として活躍している高橋一吉組合長に語ってもらった。

■ わたしもみょうが生産者

石田：J A 土佐くろしおは日本一のみょうが産地で、その全国シェアは6割と聞いています。組合長もみょうがをつくっているそうですね。

高橋：ええ、18アールほどハウスみょうがをつくっています。わたしはもともと農業が大好きで、住居のある山あいの田んぼではコメをつくり、基盤整備を行った平地の田んぼではみょうがをつくっています。

現在(11月上旬)みょうが出荷は終わりましたが、夏場の6～7か月間は毎日、といっても出荷のある月火水木金の5日間ですが、朝4時半頃に起きてハウスへ行き5時頃から6時半頃まで収穫と出荷調整の作業をしています。それからシャワーを浴びて農協へ出て行きます。そのサイクルがずっと続きますが、朝早くから仕事するって身体にもいいし本当に楽しいですよ。

石田：それはすごい。本格的なみょうが生産者ですね。稼ぎはどのくらいでしょう？

高橋：ここは全国唯一の周年出荷産地ですが、期間全体の所得でいうと10アールあたり200万円から300万円くらいでしょうか。所得率は20～25パーセントといわれています。家内と2人でやっています。

石田：息子さんや娘さん夫婦は手伝わない？

高橋：息子は独自にきゅうりをつくっています。大学に行ってましたが、在学中に目覚めたのでしょうか、家に

戻って農業を始めました。最初はわたしのみょうがを手伝っていましたが、その後にきゅうりを始めました。

今はきゅうり部会の副部会長をしています。同世代の生産者たちとチームを組んでハウスのビニール張りやら修繕を共同作業で行っています。



自身のみょうがの繁忙期が終わり、息子さんのきゅうりの収穫を手伝う高橋組合長

石田：きゅうり部会のメンバーは何名くらいでしょうか？

高橋：133名です。そのなかの若い衆たちがお互い助け合っていこうよということなので、非常にいいことだと思っています。

定植も共同でやっています。1,000～2,000株植えるのに2～3時間かかるのですが、これを30分くらいで終わらせます。年寄りたちと違ってスピードがものすごく速い。能率が違います。

石田：あれってかがむんでしょ。腰が痛くなりませんか。

高橋：当然かがみますよ。次の日はふくらはぎから太ももにかけて痛くて痛くて…。

石田：みょうがも同じでしょ。

高橋：みょうがは土耕ではなく、養液栽培なのであまり疲れません。それに多年草なので定植作業も本数の割には多くなりません。

石田：みょうがは30アールくらいまでなら夫婦でやれると聞いています。それ以上になると体力的に厳しいということでした。

高橋：わたしはみょうがを15年前からつくっていて、つらさというより楽しきのほうが勝ちますね。みょうがとコメのほかに、少しだけですがブンタン（土佐文旦）もつくっています。

石田：土佐版の「半農半X」ですね。土佐だからこそできる農業のある暮らし、うらやましいかぎりです。

高橋：もともとここはきゅうりが主流で、次いでピーマン・しとうがありました。そこにみょうがが入ってきて、あれよあれよという間にみょうがが増えて、ピーマン等からみょうがに転換する生産者が増えました。そのピーマン研究会は生産者が減ったことから令和6年度に解散しました。



取材には、高橋謙・代表理事常務（左）、土居裕明・営農販売部部長（中央）、小松菜穂・営農販売部農業振興課職員（右）にも同席いただいた

■ みょうが販売額が75億円を突破

石田：令和6年度末(2025年3月)の部会構成は、主だったところで、みょうが部会214名、きゅうり部会133名、露地・雨よけししとう部会88名、ハウスししとう部会36名となっています。

高橋：わたしが須崎市農協に入ったのは昭和54(1979)年ですが、その頃みょうが生産者はいませんでした。その後、昭和59(1984)年に4名の生産者が高知県園芸試験場で開発された促成栽培技術を使って試験栽培を始めました。それをきっかけに生産者が増え始め、昭和63(1988)年には生産者16名でみょうが部会を結成しました。

わたしの販売課に配属になったのは翌年の平成元(1989)年です。この年の生産者は26名でしたが、その翌年の平成2(1990)年には45名になりました。これをみてわたしの前任者の矢野俊二組合長が「これは大事になるぞ」と言ったことを覚えています。

それまでみょうがの出荷形態は200グラムと100グラムの2種類で、業務用として段ボール製の化粧箱を使うのが主流でした。高級品の扱いでした。

しかし、安芸(高知県東部の安芸郡北川村)のほうで家庭用の50グラムストレッチパックが使われ始め、急速に普及していきました。バブルがはじけて業務用が不振となり、家庭用として値ごろ感のあった50グラムストレッチパックが伸びたことが要因でした。戸惑いながらもわがJAも急ぎこれを導入して、家庭用の販路拡大を図りました。平成3(1991)～4(92)年のことです。

石田：50グラムパックというのは、みょうがが3本入っている底地が黒のパックのことですよね。みょうがの赤と底地の黒のコントラストがいかにも高級感を漂わせています。

高橋：そうです。その50グラムパックが消費者の購買意欲を高め、生産者の増産意欲を高めました。生産者は平成7(1995)年に100名を超えた、平成12(2000)年には200名を超えるました。販売額も平成2年の5.9億円から、平成7年15.1億円、平成12年33.6億円へと倍増していました。

今年、令和7(2025)年は214名の生産者に対して販売額は77.3億円に達し、11月4日に「みょうが部会市場販売額75億円突破記念大会」を開いたところです。令和7園芸年度の園芸品販売額(市場売上金)は総額で111.9億円ですから、みょうがだけでおよそ7割を稼いだことになります。



2025年開催の全国家の光大会の記事活用の部で体験発表をした深瀬夏枝さんは、元JA職員で、みょうが導入当時の苦労をお話しいただいた

石田：高知県のどこでもその可能性はあるのに、JA土佐くろしおのみょうがが全国を席巻するようになった理由は何でしょうか？

高橋：いろいろな理由はあるでしょうが、いちばんは、生産者とJAが一丸となってみょうがを育てたことがあげられると思います。営農指導員はもとより生産者の努力は本当に素晴らしいものでした。とくに部会の果たした役割が大きかったと思います。

■ 種茎の統一が産地発展をもたらした

石田：種茎の統一ってどういうことでしょうか？

高橋：部員であれば、だれもが無料で種茎を入手できます。その種茎は部会のものだからです。

石田：その種茎が優良系統だった？

高橋：それもありますが、種茎をみょうが部会(栽培している生産者)から分けでもらえて、出荷できるという仕組みをつくったからです。

初代のみょうが部会長と、何人かの仲間たちが種茎を部員みんなに分けたのが始まりです。自分たちの種茎を独占することなく、みんなのものだと言って、品質のよいみょうがをつくりましょと呼びかけていったのです。

みょうがで儲かったというと、その種茎は他人に渡さないのがふつうですが、そうしなかった。その協同のこころが生産者を増やしていく大きな理由だと思います。県内にはさほど伸びなかつた産地もありますが、部会とJAの取り組みの違いがその差を生んだように思います。

石田：土耕から養液栽培に転換したのはいつ頃でしょうか？

高橋：平成10(1998)年に養液栽培の試作が2名の生産者によって始まりました。ちょうどその年の9月に高知県で「98豪雨」というのがあって、管内全域で被害が続出しました。とくに海沿いの須崎市浦ノ内・池ノ内地区の被害が大きかったです。ハウスの倒壊、土壤の流亡や塩害の発生、根茎腐敗病の多発な



写真左：みょうが栽培に取り組む新規就農者のハウス。右：養液栽培用のヤシガラは使用後、愛媛県JAにしうわ管内のかんきつ栽培用の堆肥としてリサイクル利用されている

どの困難に見舞われました。それは同時に種茎の不足を引き起こし、種茎の確保に追われ、県内の他産地(興津、伊野、三里など)から譲り受けました。

そんなことあって土耕ではまずい、再開がむずかしい、という認識が生産者の間に広がり、パーク堆肥を使った養液栽培が急速に広がりました。養液栽培でも同じような被害は起りますが、毎年、栽培培地を更新することで被害を少なくすることができます。そんなことから平成24(2012)年には養液栽培比率が90パーセントを超えるました。

石田：今はパーク堆肥からヤシガラに変わっていますね。

高橋：ええ。パーク堆肥はJAでつくっていましたので、これを使わない手はないだろうということで広く使われ出しました。しかし、栽培面積が大きくなると、パーク堆肥が不足することからヤシガラに変わっていきました。スリランカから輸入しています。

石田：技術的にはどんな違いがありますか？

高橋：みょうが栽培のポイントは鮮やかな赤色を出すことにありますが、花蕾(からい)が土から出て光(紫外線)を浴びると、赤みがかかった色から緑に黒みのかかった色に変色していきます。ですから、花蕾が出るか出ないかというところを見計らって採取するのがポイントとなります。

光を遮る、すなわち遮光という点では、土壤が最も優れていて、次にパーク堆肥、その次にヤシガラという順になりますから、本来はヤシガラを使いながら赤みがかかった色を出すのはむずかしい。ですから、大きさが均一で、形が整っていて、赤みがかった花蕾を採取する、これこそが生産者に課せられた核心技術なのです。

みょうが部会市場販売額75億円突破記念大会

本文に記したように、令和7年11月4日、みょうが部会市場販売額75億円突破記念大会が開催された。この大会では、東北地区から九州地区までの主要取引会社10社に感謝状が贈呈された。

大会資料には、昭和60(1985)園芸年度から令和7(2025)園芸年度までの生産者数と市場売上金のほか、歴代のみょうが部会長のお名前と主な出来事が記載されている。

ここで園芸年度は前年9月から当年8月までの期間を表している。また、JA土佐くろしおは平成9(1997)年4月1日設立のため、統計数値は平成9園芸年度まではJA須崎市、それ以降はJA土佐くろしおのデータとなっている。

歴代部会長のお名前と主な出来事(抜粋)は次のとおりである。

- ・岡田博昌さん(昭和63～平成7年)周年栽培の確立、50gストレッチパックの開始、平成5年11月中旬の集中豪雨による冠水被害で根茎腐敗病多発、病害多発のため採種圃場が確保できずJA土佐くろしお管外から譲り受け。
- ・池田和夫さん(平成8～9年)予約相対取引の本格的開始、JA土佐くろしお園芸部発足。
- ・上田守伸さん(平成10～12年)98豪雨の発生、JA土佐くろしお独自キャンペーン「奥様5,000円プレゼント」開始、反響を呼ぶ。
- ・山崎好勝さん(平成13～16年)生産者作業場にエアコン完備、JA出荷場に予冷施設設置、大雨による冠水と台風の被害。
- ・松浦伸人さん(平成17～20年)みょうが部会女性部発足、大間第2出荷場完成、完全コールドチェーン化確立、“とさっ子みょうがちゃん”着ぐるみ誕生。
- ・長山篤さん(平成21～24年)県単独価格安定事業(特定産地の指定)創設、重油価格高騰によりヒートポンプエアコン導入開始。
- ・大野彰さん(平成25～28年)廃液循環装置試験機導入、環境制御技術試験開始、種蒼予冷庫完成、“6月13日いいみょうがの日”制定。
- ・井上貞彦さん(平成29～令和2年)国のパワーアップ事業により廃液循環装置導入開始、二代目“みょうがちゃん”着ぐるみ誕生、自動箱詰口ボット整備。
- ・堅田明さん(令和3～6年)くろしおみょうが生産拡大・販売拡大プロジェクト開始。再生培地ストックヤード建設、SDGs倉庫完成。
- ・中西拓郎さん(令和7年～)新しい販売形態であるピローパックの試験開始、ふるさと納税の返礼品への出品開始、出荷量過去一番の約3,700トン。

